

情報の彫刻 まとめ

第一段落

第一段落は、三月の特別授業でやった内容を思い出して読んでほしいと思います。筆者の主張は一般論の裏返しであると言うものです。そして一般論と筆者の主張の間には逆説の接続詞が入ることが多いと言う説明がなされていたと思います。

本文の第一段落を見てみると逆接の接続詞が二カ所あります二行目と五行目の「しかし」です。ただしどちらの逆説も重要なわけではありません。二行目のしかしの前後に注目すると、こちらはしかしの前の部分が一般論とは言えません。逆に「しかし」の後の部分が一般論になっています。五行目の「しかし」の前後に注目すると、こちらは「しかし」の前の部分が一般論になっています。そして「しかし」の後の部分が筆者の主張になっています。だから五行目の「しかし」の後の部分が重要と言えます。

第二段落

第二段落は「無意識の平面」という語の意味をしっかりとおさえましょう。この第二段落ではこの「無意識の平面」とはどういうことかについて説明がなされています。我々は紙を使うときに理由を考えません。たとえば、授業でプリント配るときも、教員は紙以外の選択肢を考えることはありませんし、受け取る側も「なんで紙？」と考えることはありません。それは、情報の掲載するものといえれば当然紙だと長い間考えられてきたからです。紙は情報に乗せるためのものだと考えられてきた結果、紙の物質的特性が注目されることはありませんでした。

第三段落・第四段落

第三段落以降はみなさんよく読めていたと思うので解説を省略します。

第五段落

第五段落について、「小論文を書くときに」という視点から、すこし説明を加えます。第五段落のように、他の似ているものにたとえて自分の意見を主張する方法をアナロジー（類比論法）と言います。アナロジーはわかりやすい反面、理由としてはすこし弱い部分があります。それは「それとこれとは話が別」といわれてしまうとどうしようもないということです。今回の文章でも「食物は実際に物質を食べないと栄養にならないけど、情報は物質ではなくても意味は伝わるので、そもそも食物と情報は似ていない」と反論されてしまうとどうしようありません。ですので、みなさんが小論文を書くときにはアナロジーだけで自分の主張を説明するのはやめましょう。この文章の筆者も第六段落で、実際の書籍の話をするので、理由を補っていきます。

第七段落・第八段落

ここもよく読めていたので解説を省略します。

第九段落

最後に第九段落です。前回の問題にもなっていた「幸福な課題」といえるのはなぜかという部分がわかりにくいと感じた人が多かったようです。第二段落で確認したように、「紙」はその素材としての特性を無視されてきました。つまり、今までは紙に掲載されている情報だけが評価の対象であり、紙であることは評価の対象ではありませんでした。たとえば、本を買うときに本の内容については気にしても、紙の材質について気にする人はほとんどいません。もし彫刻作品を購入するならば、モチーフについてだけでなく材質についても（石なのか、木なのか、銅なのか、粘土なのか、石膏なのか）も気にするでしょう。でも、本の場合はこれまで情報の部分だけしか評価の対象ではなかったのです。しかし、情報を紙に掲載することが当たり前でなくなった今、「なぜ紙？」という部分が評価の対象になってくるだろうと筆者は言っているのです。もちろん評価の対象になるということは、低い評価になってしまう可能性もあります。とはいえ、紙の気持ちになって考えてみると、いくら使われても評価の対象にならなかった今までに比べれば、評価の対象にしてもらえるということは幸福なことです。

小論文を書くときに

最後に小論文を書くときに、もう一つこの文章から参考にしてほしい点があります。それは、この文章の主張は紙の本のよさについてですが、電子メディアを否定しているわけではないということ。電子メディアのよさも紙の本のよさも認めて、両立できるとしています。こういう偏らない主張ができることが小論文では意外と重要です。単純にどっちもどっちという主張ではだめですが、どちらか一方に偏り過ぎていてもいけません。小論文の課題になるようなテーマというのは、偏った意見で解決できるほど甘くないからです。大学側も社会も、両方の意見を取り入れた上で、よりよい意見を出せる人を求めています。